

書 評 BOOK REVIEW

ウォーカブルなまちを評価する

一ノ瀬友博＋国際交通安全学会ウォーカブルなまち研究会編著，231 頁，
定価 2,300 円，発行：鹿島出版会 ISBN 978-4-306-07372-2

ウォーカブル（walkable）は、国土交通省が提示している「居心地がよく歩きたくなる」を意味し、歩く（walk）と、出来る（able）を組み合わせた造語である。本書は、このウォーカブルを視点に都市の在り方や都市に関わる様々な内容についての評価を国内外の事例を含めて書かれている。また、本書は研究調査のプロジェクトとして取り纏められており、その成果公表を示しつつ、理解しやすく書かれている。

本書は4つの章で構成され、まず第1章では、現在の都市の状況や在り方について、最近の事例を取り混ぜながら論じられている。COVID-19によって、日常生活自体の変革から、我々が日々当たり前に行動していた都市生活が、当たり前に行動が出来なくなったのは記憶に新しい。変わらざるを得なくなった都市の在り方を見つめ直すきっかけや、移動手段、健全な生活について記述されている。ウォーカブルによる町の形、つまり歩いて暮らせる都市とはどういった事なのかをこの章では、図を提示しながら丁寧に記述がされている。

第2章では事例として、欧米と日本における町をそれぞれ示し、説明がされている。欧州ではパリやウィーンなど、米国ではボストンやニューヨーク、日本では東京や島根などを事例に提示されている。欧州では、都市の歴史性からの成り立ちを踏まえ、道路自体を変えてまでのウォーカブルなまちへの社会実装についての説明、自動車などの交通を制約しての取り組みなど、歩行者と自転車中心とした実装について事例として丁寧に示されている。米国も同様で公園や緑地の歴史的成り立ちを活用した交通網のシステム、そこに人が歩きやすい空間の事例を示しており、大変分かりやすく書かれている。こういった活用やデザインの事例は、我が国でも活用できる内容で示唆に富んでいる。

日本でも東京丸の内での取り組みでは、ストレス評価のような科学的な点を視野に入れ、実験的に行われている点が大変興味深く、緑や熱環境、環境そのものの在り方、丸の内における街路公園化、すなわち street park の構築に向けた事例を示している事から、事例として参考になる取り組みと言えよう。島根県出雲市での神門通りの取り組みについても書かれており、ワークショップでの流れ、その後の整備の具体策、活用の仕方などその過程が分かりやすく示され、日本の街路整備に役立つと言える。本書に記述されていた丸の内、神門通りを私自身も個人的に実際見学してきたが、本書に示されている点が学べて大変勉強になった。

第3章では、実際に都市と街路における空間性の評価軸について図を交えながら説明がなされている。この評価については、自動車と歩行者にとっての関係性から、街路の在り方を示している点について、都市計画においても参考になる内



容といえる。加えて、街路分析、人流についてのデータの活用、様々な計測手法についての活用方法、AIを活用した分析や評価手法についてなど、その成果を示しながら記述がされている。ウォーカブルなまちについての視点の中で、土地取引の価格についての言及もあり、興味は尽きない。

身体的・精神的・社会的に良好な状態を示す言葉でもあるウェルビーイング（Well-being）については、都市の内外における緑化と健康について示し、ウォーカブルなまちの構築にあたっての健康につながる点が記述され、歩く事の大切さと地域ケアにも言及されており、内容が大変充実している。加えて、温熱環境といった実際に歩いて体感出来る内容についても、データを示しながら提示されており、今後の街路の在り方を考える内容として深く書かれている。

第4章では、以上を踏まえての討論方式での記述になっており、登壇者における説明、現場での生きた話の内容が読み取り、本書を纏める内容として大変興味深い討論会の議事録になっている。

本書は、関係する研究者にも読んで欲しいものではあるが、それ以上に業界や行政の担当者の方々に読んで頂き、活用して欲しいと思う書籍である。今後の都市をどう計画するのか、また都市をどう私たち利用者のために良くしていくのか、役立つと言え、是非一読するのをお勧めしたい書籍である。

福井 亘（京都府立大学大学院）